

企業がまちづくりに関わる時、どのような関わり方があるのでしょうか。
今回は、地域で起こったまちづくりへの機運に、いわゆる電線地中化をはじめとする環境調和型の電力供給設備で応える、関西電力京都支店の取組をご紹介します。

環境調和型設備の提供でまちづくりに参加

八坂通を例に

2年前、通りを横断する電線類がなくなり、東大路通から八坂の塔がはっきりと見えるようになったことで「電線類が地中化された通り」としてよく知られている東山区の八坂通。ここは、一部が京都市の伝統的建造物群保存地区*に指定されています。数年前、「良好な都市環境を保つまちづくりをしたい」と地元から京都市に話が合ったことがきっかけで、



S字に曲げて目立たなくした電柱

「電線類についても、景観調和を考慮した改修工事をしてほしい」と要請があり、関西電力やNTTでも整備に向けた検討をされました。合わせて行政でも、歩車道や石畳化

の整備が進められました。

関西電力京都支店お客様室の福田氏いわく「実はあの景観は、電線類の地中化（地中配電設備）だけで実現したのではないのです。もちろん地中化によって電線類の整備を行うこともできますが、変圧器や開閉器等の設置スペースが地上または地中に必要なため、スペースの確保やそのための敷地提供をはじめとする地元の協力が欠かせません。また、一度提供のあった敷地を、持ち主が変わったから返す、ということでは安定した電力供給はできません。八坂通の場合は、自治会の協力や行政による地元との意見調整等を経て、通りを横断する電線（架空線）の配電ルートを変える、電柱を低くしたり町並みになじむ色に変える、また、S字に曲げて目立たなくするなどの方法で整備を行い、現在のような景観を生み出しました」。

企業を動かす地域ニーズ

「コスト面だけを考えれば、地上に電柱を立てて電線を張りめぐらす方法が最も合理的です。この通りは、昔ながらの商店街で住民の入れ替わりが少なく、自分たちのまちをこうしたい、という文化的な考え方が育ち共有

されたのでしょうか。それに対し、企業として何ができるのか、です。京都は古いまちですから、間口の狭さなど、他のまちにない特徴もありますし、地域ごとの雰囲気などもずいぶん違います。ですから、技術面だけでなく、ご相談いただいた地域の個別の実情に応じた提案をさせていただいています。電力会社としては、電力の安定供給が大前提です。そのうえで、合理的な配電方式やまちづくりに融合したデザインの採用といった環境調和型の設備を今後ともご提供できればと思っています」。

まちづくりに生きるパートナーシップ

市内には、八坂通のほか、四条通、先斗町、祇園新橋、嵯峨鳥居本町など、関西電力がまちづくりに関わった事例があります。

かつて、どこよりも早く住民自治を発達させ、まちを育て上げてきた京都。時代は変わっても、まちづくりに対し地域、企業、行政が応分の負担、協力を惜しまない、そんな心意気が活力あるまちを生み、守り育て、まちに新たな歴史を加えるのでしょうか。



八坂通から八坂の塔を臨む

*伝統的建造物群保存地区：伝統的建造物群による歴史的環境を守るため指定している地区